

語法研究のめざすところ*

山内信幸

0. はじめに

英語の文法の実証的記述をめざし、「英語の具体的な語彙や構文の特性を1つ1つ明らかにする」¹⁾ために、1993年11月に英語語法文法学会が設立された。この学会は、日本の英語学研究において、普遍文法理論の構築を最大課題とする最近の学会の趨勢に一石を投じる形で、英語という言葉の個別文法の記述の重要性を説いている。本稿は、欧米における usage 研究に関する理論的な側面の議論を整理し、それらの議論を足がかりとして日本における語法研究のあり方を探ろうとする試みである。

まず、言語研究における2つの大きなアプローチの意義—たとえば、普遍文法と個別文法、形式主義と記述主義など—と‘usage’にかかわる諸問題について概観する。さらに、‘usage’を決定する要因の1つとされている‘acceptability’とその理論的意義を考察し、英語の非母語話者として日本人研究者が語法研究に貢献できる可能性について論ずることにする。

1. 言語研究をめぐる2つの立場：‘theory-oriented approach’ と ‘data-oriented approach’

言語研究をめぐっては、たとえば、極度に抽象化された形で言語の形式的な構造を解明しようとする立場と実際の言語の使用に鑑みて言語の機能を解明しようとする立場、自然言語一般に共通する特質を探る普遍文法的アプロ

ーチと英語や日本語など個々の言語の特徴を扱う個別文法的アプローチなど、いくつかの対立する考え方が存在しているように思われる。これらの考え方の相違は、大まかにわけて、言語理論の構築をめざしているか、あるいは、言語データの観察・記述をめざしているかに集約されうるといえよう。そこで、前者の目標により傾斜している立場を‘theory-oriented approach’、後者の目標をより重視している立場を‘data-oriented approach’とよぶことにする。たとえば、Chomsky を中心にした生成文法のような formal linguistics は前者のグループに、コンピュータ化されたコーパスを利用した研究のような corpus linguistics は後者のグループに含まれる。

次に、これからの議論をより明確にさせるために、Chomsky (1965) で提示された方法論上の基本的概念のいくつかを検討してみよう。

Chomsky (1965) は、言語理論はまったく等質な言語社会における理想上の話者・聴者を対象としなければならないとし、言語研究が扱わなければならないものは、当該言語の話者・聴者がもっているその言語についての暗黙の知識、すなわち、competence (言語能力) であり、具体的な場面における実際の言語の使用である performance (言語運用) とは峻別した。Chomsky (1965) のことばを借りれば、言語記述の目標は、performance の記述ではなく、“a description of the ideal speaker-hearer’s intrinsic competence”²ということになる。

このような competence と performance の区別は、ちょうど、もう1つの基本概念である grammaticality (文法性) と acceptability (容認可能性) の区分に対応する。³前者の概念はまさしく文法そのものが説明できる、あるいは、しなければならないものであり、後者の概念は母語話者の態度・判断を反映しているものと考えられる。通常、grammaticality は、ある言語事象が文法規則によって説明されるデータに含まれるか否か、すなわち、ある言語現象が correct か incorrect かという二項対立的な決定を意味しているのに対して、acceptability は、容認可能なものとそうでないものというような区分ではな

く、その容認可能性は一種の連続体をなしていると考えられる。⁴

以上の competence vs performance, grammaticality vs acceptability という基本概念について、若干の批判をくわえてみよう。

まず、competence vs performance に関連する問題点として、言語研究の対象を competence に限定したために、それ以外のものはすべて performance の領域に属するものとして未整理のままに残されているという問題があげられる。「理想的な話者・聴者」という理想化によって、言いよどみ・言いまちがい・くり返しといった現実の言語現象の大部分をすくいおとしてはいないかという危惧が、社会言語学やマクロ的な言語研究に関心のある研究者らによって当初から指摘されてきた。⁵

また、performance という用語をみた場合に、performance と language use (言語使用) を同義にとらえてもさしつかえないかという問題もある。Aarts (1991) では、‘language use’ という用語は「competence の規則に基づいてはいるが必ずしも拘束されない言語活動の産物」⁶をあらわし、‘performance’ とは同義ではないとされ、また、performance はあくまで ‘productive’ な能力に根づいているのに対し、language use は ‘recognitive’ な領域に属するものとして扱うべきである旨が述べられている。⁷

さらに、母語話者の直観や実際の language use を考えた場合、一個人レベルにとどまった狭義の観点ではなく、他者、すなわち、より大きな言語集団を対象にした広義の観点に基づくべきではないかということも考えられるが、この問題についてはあとで検討することにする。

一方、grammaticality vs acceptability に内在する問題を考察する手がかりとして、次の例文をみてみよう。

(1) My grandfather's grandfather's father's grandfather's grandfather's father's grandfather's father's grandfather's grandfather's father's father was an Italian. (Aarts 1991: 48)

(2) And what a performance by the man *who* some of us thought that may be

[maybe] the pressure of being the favourite of Wimbledon might not let *him* win. (Aarts 1991: 48)

(1) はくり返し規則をふくむ形式文法では当然可能な表現であり、その意味で、*grammatical* ではあるが、実際には、*unacceptable* なものとみなされている。また、(2) は関係詞節内にある *him* は当然空所化されなければならない、その意味で、*ungrammatical* な文ではあるが、実際のコーパス（話しことば）のなかで観察されたもので、*acceptable* なものと考えられる。

これら2つの例が示すように、*grammaticality* といった場合、いわゆる、文法規則だけで '*grammatical*' と '*ungrammatical*' に峻別できるのか、また、*acceptability* のスケールは具体的にどのような尺度を設けるべきなのか、さらに、*grammaticality* と *acceptability* の相関関係はどのようにになっているのか、あるいは、これら2つと実際のコーパスとはどのようにかかわってくるのかなどについて考えてみる必要がある。

最後に、方法論上の問題とは別に、言語表現の '*centrality*' の問題についても、一言つけくわえておかなければならない。ここでいう '*central*' なものとは、言語表現として開いた類に属していて、その表現の分析が他の言語表現の分析にも適用可能なものをさし、従来の '*theory-oriented approach*' が分析の対象としてきたものである。そのため、次のような例文は分析対象になりえない、あるいは、なりにくいものとされてきた。

(3) What if it hadn't drifted in by accident? (Aarts 1991: 53)

(4) One glimpse of his twelve-bore, and Lawrence whizzed of . . . (Aarts 1991: 53)

これらは、いわば、'*peripheral*' な表現と位置づけられ、言語表現として閉じた類に属するものとみなされる。具体的には、たとえば、次の例のように、"You are welcome." にみられるような定式化された表現や "*vice versa*" のような *idiosyncratic* な構文をさす。

(5) a. Sue, here you are.—Thank you.—*You're welcome.*

- b. Sue, you are beautiful.—Thank you.—**You're welcome.* (安井 1994: 51)
- (6) a. He believed that John would beat Ned, but not *vice versa*.
- b. To translate from English into Navaho, or *vice versa*, frequently involves much circumlocution. (山内 1994: 531)

健全な言語研究という観点からすれば、‘theory-oriented approach’が分析対象としてきた‘central’な言語表現だけでなく、上のような‘peripheral’な言語表現をも手がかりにして言語記述のいっそうの精緻化をはかるといった視点はきわめて重要なように思われる。

次節では、‘data-oriented approach’の1つと目される usage 研究に焦点をあて、‘usage’にかかわる諸問題について概観することにする。

2. ‘usage’をめぐって

今までの議論において、‘usage’と「語法」という用語を暗黙のうちに使われてきたけれども、ここでもう一度明確にしておく必要がある。欧米で（とりわけ、ヨーロッパを中心に）おこなわれてきた usage 研究は、コンピュータ化されたデータやネイティブのインフォーマントの言語的直観に依拠して、それぞれの言語表現の grammaticality や acceptability をはかるもので、その扱う範囲は、発音 (ex: *harássment* vs *hárrassment*)・語彙 (ex: *disinterested* vs *uninterested*)・綴り字 (ex: *blamable* vs *blameable*)・文法 (ex: *The Government ought to immediately increase pensions.* <split infinitive>) といった広範囲にわたる。

ここでの視点は、客観的・記述的であることを旨とし、その言語表現がどれだけ人口に膾炙しているかが問題となるため、「この表現は存在しない」とか「これはめったに使われない」という言語事実の指摘にとどまり、それら一連の表現をとりまく規則や制約の解明といった「なぜ」を問うことはあまりなかった、あるいは、できなかつたように思われる。その意味で、個々のデータをつぶさに検討しつつ、一方で、あくまで「文法」にしばられて、

漠然とした形で「理論」の構築というものを意識しながらおこなわれてきた「語法」研究とは一線を画するもので、欧米の‘usage’研究とは「慣用法」研究をさすと考えてもさしつかえなからう。⁹

「慣用法」と「語法」との違いをもう少しはっきりさせるために、実際にどのようなものが‘usage’研究の対象になりうるかをみとめることにしよう。

Ison (1985) は、‘usage’の問題となりうる条件に、(a) actual occurrence, (b) fairly widespread occurrence, (c) discussability without giving offence の3つをあげている。¹⁰

(a) の条件は、その表現が実際に生じるかどうかであって、人がいいそうにもないことではなく、実際に口の端にのぼるものでなければならない。そのため、“unique”の比較級や最上級表現である“a more unique experience”や“the most unique experience I’ve ever had”は‘usage’の問題となりうるけれども、“atomic”の比較級や最上級表現の“a more atomic bomb”や“the most atomic bomb of all”は実際に用いられない表現のため、‘usage’の問題とはなりえない。

(b) の条件は、その表現が一地域に限られるものではなく、かなり広範囲にわたって用いられているかどうかである。たとえば、“isn’t”のかわりに用いられるとされる“ain’t”は‘usage’の議論の対象となるけれども、イギリスの一部の地域で用いられる“bean’t”は除外されることになる。

(c) の条件は、不快感をひきおこすことなく議論の俎上にのぼすことができるかどうかである。“fuck”や“damned”のような卑猥語や罵り語のたぐいが実際の会話に用いられて、その是非が問われることがよくあるけれども、これはことばのレベルの問題で、厳密な意味での‘usage’の議論とはわけたほうが賢明であろう。

これら3つの条件との関連で、‘usage’と少なからずかかわると思われる「規範 (prescription)」¹¹という問題についてもふれておかななければならない。次の例文 (7) は、従来の規範文法では、「前置詞でおわる文はよくない」と

いう歴史的あるいは審美的(?)理由により、さけるほうが望ましいとされ、従来からしばしば‘usage’の議論の的となってきた。

(7) a. He is a difficult person to deal with.

b. That must be the drawer she took it out of. (Quirk & Stein 1990: 228)

しかしながら、Quirk & Svartvik (1966)がおこなった実験調査では、規範に基づいた(8a)の例文よりも、規範から逸脱したとされる前置詞が文末に残る(8b)の例文のほうが高い容認度を示した。¹²

(8) a. It's the man to whom I spoke.

b. It's the girl I spoke to. (Quirk & Svartvik 1966: 106, 108)

また、同様に、‘usage’と「規範」との関係でとりあげられる話題としては、次のような代名詞の格に関するものもある。(9)の例文は、それぞれ、informalな場合に好まれ、(10)の例文はformalな場合に好まれるとされているが、実際には、(9)のほうが多く用いられている。

(9) a. Who did you see there?

b. He is a bit taller than her.

c. Don't be alarmed: It's only me! (Quirk and Stein 1990: 230-231)

(10) a. The committee will decide whom to appoint.

b. No one has served the company more loyally than she.

c. It is I who must now assume responsibility. (Quirk and Stein 1990: 231)

言語が変化するにもなって、それをを用いる人々の態度・意識も変化し、しかも、それが一様ではないということを考えあわせると、理不尽な「規範主義」にしばられたままで一括して‘usage’として扱うことは言語の実態にそぐわなくなってくるため、‘usage’の問題と伝統的な意味での「規範」とはある程度切り離して考える必要があるだろう。

次節では、‘usage’を決定する際に重要な役割を果たす‘acceptability’とその理論的意義について考察することにする。

3. ‘acceptability’をめぐって

本節では、まず、acceptability そのものに関する問題を論じ、次に acceptability をとりまく諸概念を比較検討する。さらに、「慣用法」と「語法」のそれぞれの領域を再整理し、日本の語法研究のあるべき姿をさぐることにする。

まず最初に、acceptabilityとはなにかを考えてみよう。

第1節でもみたように、acceptability は ‘language use’ (厳密には、Chomsky のいう ‘performance’ に若干 ‘competence’ 的なものがふくまれているもの) に対する母語話者の判断ととらえることができる。その際の母語話者の判断というのは、絶対的な基準によるのではなく、かなり柔軟な基準によると考えられる。たとえば、Quirk (1985) の次の発言をみてみよう。

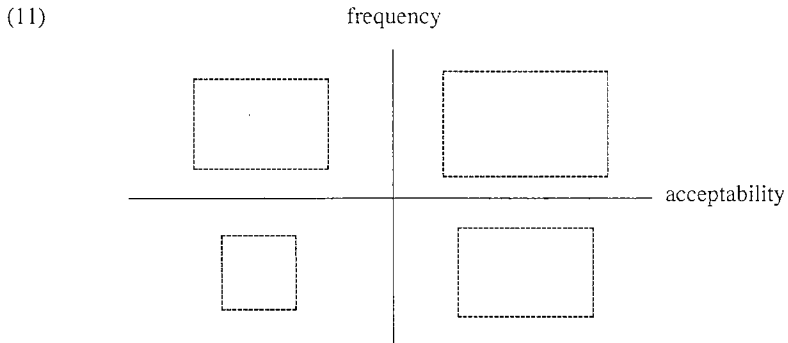
Acceptability is a concept that does not apply exclusively to grammar. Native speakers may find a particular sentence unacceptable because (for example) they consider it logically absurd or because they cannot find a plausible context for its use or because it sounds clumsy or impolite. However we are concerned only with the acceptability of forms or constraints on the grounds of their morphology or syntax.¹³

ここで確認しておくべきことは、母語話者が容認不可と判断する場合には、文法の情報以外の要素がはいりこむことが考えられるが、ここでは、あくまで、文法（形態論や統語論）的な情報に限定しているということである。

次に考察すべきことは、実際に使用されること（その頻度を数値化したものを ‘frequency’ という）と実際に容認されることとの相関関係についてであろう。Greenbaum (1976) のおこなった acceptability と frequency の相関関係に関する実験では、語彙内容に相違があっても、統語論的に類似しているよう意図された文章の acceptability と frequency についての統語論的な判断に関しては、被験者は全般的に一致していたことが示された。¹⁴ このことから、frequency に関する判断は acceptability と同様に信頼できるもので、frequency

についての判断と acceptability についての判断には相関関係があると考えられる。それゆえに、acceptability という個人的にもゆれがあり、客体化しにくい判断基準をより客観的なデータとして経験的に実証するには、コンピュータ化されたコーパスを利用した frequency の調査が有用であると認められる。¹⁵ (コーパス言語学についての詳細な議論はここではふれない。)

Greenbaum (1976) の実験結果をふまえて、acceptability と frequency の相関関係を図示すれば、次の (11) のようになるであろう。この図では、相関関係の大きさを四角の大きさを表して、あくまでその度合いを相対化したものである。



今までの議論をもう一度整理してみよう。まず、acceptability の判断に文法的な判断基準が過度にくわえられてしまうと、一種の「規範」というものに束縛されかねない。しかし、acceptability の判断にある程度の文法性に関する情報が必要である以上、その文法性の判断については、一個人 (Chomsky 流に言えば、理想的な話者・聴者) の母語話者の直観によるのではなく、その言語共同体の多くの母語話者が正しいと判断し、容認したものである必要がある。これは、実際のマクロ的な数量化によって、コーパスを利用した頻度 (frequency) というものでさらに客観化できるが、その前に、文法性を意識した複数の母語話者の直観を反映した acceptability を前提として考えなければならないということである。ここでいう acceptability は、従

来の用語が示すものとは少し異なるため、あらたに、Aarts (1991) にしたがって、‘normalcy’ という用語でとらえなおすことを提案する。

It [The notion of normalcy] has to do with linguistic attitude, determined among other things by prescription. In that respect, a grammar of language use might well be a normative grammar, if we understand ‘normative’ as ‘based on the norms set by a not insignificant part of the language community’ —that is, a grammar of structures used (frequency) as well as accepted (normalcy) by a large number of language users.¹⁶

多くの母語話者の直観に基づいて容認されている normalcy であれ、コーパスのなかにあられる frequency であれ、これらは言語データとして依拠すべき判断基準であり、Aarts (1991) は、‘currency’ という1つの概念でまとめることを提案している。¹⁷ 本稿でも、Greenbaum (1976) の実験が示したように、normalcy (広義の acceptability) と frequency が相関関係を示しているため、のちの議論を簡略化するために、両者をまとめた上部概念として ‘currency’ という用語を用いることにする。

今までは、acceptability とそれに関連する諸概念をみてきたが、まだ残されている課題として、「慣用法」と「語法」とはどのような関係になるかという問題が扱われなければならない。

言語研究の判断材料として、上でみたように、まず、母語話者としての直観、しかも、文法性を意識した複数の母語話者としての直観をもとにした normalcy が考えられる。しかし、この判断には個人的なゆれや主観的な要素がはいりこむ可能性があるため、より客観的なデータをえるために、コーパスにあられる頻度 (frequency) を調査することが考えられる。これら2つは、あくまで、‘data-oriented’ なソースである。しかしながら、「あるがまま」のデータを記述するだけでなく、なんらかの言語学的分析・考察をくわえるためには、言語研究者自身の判断に負うところが大きいといわざるをえない。これは、言語研究者としてデータの向こうにある理論を意識した「文

法観」というべきものかもしれない。同様の趣旨のことを, Štícha (1994) は次のように述べている。

Acceptability can neither be determined by questionnaires nor measured by frequency only. The linguist's judgement as a result of research and reasoning is to be the ultimate measure, and the linguist must be the one responsible to decide.¹⁸

上の議論をふまえると, 次のような図式を想定することができる。この図は, 縦軸にはその言語現象が文法の範疇にはいりうるか否か, いいかえれば, その言語現象に対してどの程度文法的な意識が働いているか否か (grammar-consciousness) という尺度を, 横軸にはその言語現象が 'currency' のレベルでどの程度容認され, 生起するか (data-supportedness) という尺度を配したものである。

(12)

	grammar	
ungrammatical (grammar-unconscious) data-supported (C)		grammatical (correct) (A)
ungrammatical (incorrect) (D)		grammatical (grammar-conscious) data-unsupported (B)
		currency

具体的に, それぞれの領域にどのような例文が存在するのかを考えてみることにしよう。

たとえば, 次の (13) の例は, 英語の文法規則 (不規則動詞の語形変化, 語順) からも逸脱し, また, currency のレベルでも低いため, (D) のグループにはいると思われる。

(13) a. *I goed to school by bus yesterday.

b. *People are about snakes helpless.

では、次の(14)はどのようなであろうか。

(14) a. He pushed open the door.

b. *They painted blue their door. (Quirk & Svartvik 1966: 106-109)

(14a) と (14b) はどちらも同じ構文であり、文法規則の教えるところでは S V O C の語順を破っているため、どちらも文法の範疇から逸脱しているようにみえる。しかしながら、その容認度においては、まったく反対の結果が生じている。目的語の名詞句が長い場合（いわゆる、Heavy NP Shift）にはしばしば文末に位置に移動することが観察されるが、この場合はそのような制約には関係がなく、この両者を扱うには、おおむね、(C) の領域で検討するのが妥当なように思われる。

次に(15)の例をみてみよう。

(15) a. To hesitate would be fatal, and they will regret it.

b. *To hesitate had been fatal, and they regretted it.

c. Hesitating had been fatal, and they regretted it. (Bolinger 1980: 34)

通常、不定詞と動名詞は交換可能なように考えられているが、上に示すように、文法的な相違が生まれる場合がある。通例、不定詞は「非現実的あるいは仮想的なこと」をあらわし、動名詞は「具体的あるいは現実的なこと」をあらわすとされるため、(15a) はたんなる可能性を述べているために不定詞が用いられ、(15b) と (15c) では、知られている事実を述べているために不定詞ではなく動名詞が用いられている。これらは、おそらく、ネイティブなら自明のこととして無意識にあるいは直感的に判断することで、上述のような「文法的にこねくりまわす」ようなことはないと思われる。そのため、これらの例は(B)の領域にはいるものであろう。(なお、(A)の領域にはいるものは、文法的にも正しく、また、言語データとしても存在しうるものが考えられるので、具体例は割愛する。)

しかし、すべての例がこれら4つの領域にうまくはいるというものではない

く、当然のことながら、いわゆる、境界線上に位置すると思われるものも数多く存在する。その一例として、次の *whether* 節と *if* 節の交替現象を考えてみよう。

Quirk *et al.* (1985) では、*whether* および *if* に導かれる間接疑問文は、文中のある特定の環境に生じた場合に、自由に交替することはできないことが指摘されている。次の (16) ~ (19) の例が示すように、間接疑問文が、主語、主格補語、前置詞の目的語、同格となる場合には、すべて、*whether* のみが容認可能とされている。

- (16) a. Whether she likes the present is not clear to me.
 b. If she likes the present is not clear to me. (Quirk *et al.* 1985: 1054)
- (17) a. My main problem right now is whether I should ask for another loan.
 b. ?*My main problem right now is if I should ask for another loan. (Quirk *et al.* 1985: 1054)
- (18) a. It all depends on whether they will support us.
 b. ?*It all depends on if they will support us. (Quirk *et al.* 1985: 1054)
- (19) a. You have yet to answer my question, whether I can count on your vote.
 b. ?*You have yet to answer my question, if I can count on your vote. (Quirk *et al.* 1985: 1054)

また、*whether* と *if* の交替に関して、これらのいわゆる「外的環境」による制約にくわえて、「内的構成」ともいうべき形式上の条件も関与している。たとえば、間接疑問文内に生じるある一定の形式によって、*whether* と *if* の自由な交替が許されない場合があり、次の (20) と (21) の例のように、*to* 不定詞を補部にとったり、*or not* を直接導いたりすると、*whether* のみが容認可能となる。

- (20) a. I don't know whether to see my doctor today.
 b. *I don't know if to see my doctor today. (Quirk *et al.* 1985: 1054)
- (21) a. He didn't say whether or not he'll be staying here.

b. *He didn't say if or not he'll be staying here.

c. He didn't say if he'll be staying here or not. (Quirk *et al.* 1985: 1054)

このような一連の言語事象は、ネイティブなら無意識のレベルにひそんでいるものかもしれないが、文法というものを意識した観点からみると、whether と if の出沒に関して、言語データとして記述しておくにはあまりにも例外が多すぎ、なにかしらの統一的な原則によって文法的説明をおこなうことが必要となってくる。

Nakajima (1992) は、whether と if の交替に関する外的環境が that 節における that の出沒とパラレルの関係にあることから、whether 節の whether と that 節の that が、また、if 節の if と「省略された that 節」の that (厳密には、that が省略されたとみるのではなく、ゼロ形の that 節とみなす) が同じ性質をもつものであるとみなす可能性を示唆した。この仮説は、節としての構造の大きさという観点に着目したものであり、whether と if の交替に関する外的環境のみならず、内的構成についても、統一的な説明を可能にしている。つまり、(20) の不定詞節は主語の潜在化の有無の可能性によって、また、(21) の or not の前置は話題化の操作の可否によって、whether と if の交替が説明でき、これらはいずれも節としての構造の大きさに起因すると論じている。¹⁹

しかしながら、whether と if の交替現象に関して、Nakajima (1992) の主張する「節の構造の大きさ」という観点からだけでは説明できないと思われる言語データがいくつか存在する。

たとえば、(16) でもみたように、通常、if は主語節を導くことはできないとされているが、(22) のように、仮主語の it をたてる (いわゆる、extra-position) 場合は、容認可能となる。

(22) It's not clear to me whether/if she likes the present. (Quirk *et al.* 1985: 1054)

しかし、(22) と同じような構造をもっている文でも、従属節の部分が間接疑問のように感じられない場合には、whether のみが容認可能とされる。

(23) a. It's irrelevant whether she's under sixteen.

- b. ³It's irrelevant if she's under sixteen. (Quirk *et al.* 1985: 1053)

また, ask, doubt, know, learn, see, tell, wonderなどの動詞の目的語になる場合は, whether と if の交替は自由とされているが, 動詞のなかには, discuss のように if をとらない動詞も存在する。

- (24)a. They are discussing whether they should ask for a salary increase.

- b. *They are discussing if they should ask for a salary increase. (Declerck 1991: 527)

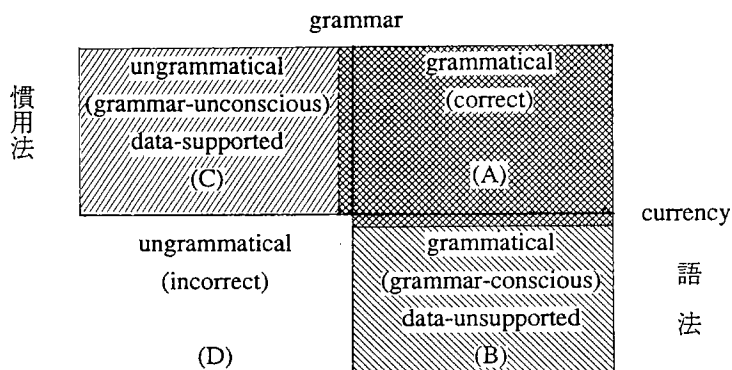
(16) ~ (21) の例文すべてにおいて, whether と if の交替現象では, 容認可能なのは whether のほうのみで, if のほうではないこと, しかも, その逆はありえないことから, (22) や (23) の例文を考察するには, 「節」に関連するなにかしらの要因が働いていると推測するのは妥当であろう。しかし, それは Nakajima (1992) の主張する構造的な制約よりも, 節としての「成熟度」あるいは「節らしさ」というような機能上の要因が関与しているように思われる。(この問題については, 本稿の議論と直接関係ないので, 稿をあらためて論ずることにする。) また, (24) のような例文を扱うには, discuss と同様の分布を示す動詞をコーパスのなかから収集し, そのデータを最大限に活用しながらそれぞれの動詞の厳密下位範疇化をおこなって, 意味素性を抽出するような方策が考えられる。

このような複雑な現象を扱うのは, はたして「文法」によって説明を試みるのか (=B), 「コーパス」によってあるがままを記述するのか (=C), 非常に微妙な問題となってくるように思われる。それぞれの言語現象に対してどの程度文法的な意識が働いているかだけでなく, その言語現象が 'currency' のレベルでどの程度容認され, 生起するかということにも目配りをする必要があり, その意味で, すべての言語現象が, (12) で示したように, 4つの領域にうまく位置づけられるわけではなく, いわゆる, 境界線上に位置すると思われるものも数多く存在すると考えられる。

今までのことからいえることは, いわゆる「慣用法」というのは, 'data-

oriented' なものを扱うべきで、主として、(C) の領域に属するものとなるであろう。一方、「語法」というのは、'currency' というレベルではネイティブにとってそれほど問題にならない現象でありながら、あくまで文法的な説明の必要なもの、つまり、'theory-oriented' なものを扱うべきで、これは(B)の領域にはいるものであろう。ただし、上の(16)~(24)でみたように、境界線上の言語現象も数多くあるため、それぞれが扱う範囲としては、次の図のように、境界線を若干こえた形で示されるであろう。

(25)



4. おわりに

本稿では、まず、言語研究における2つの大きなアプローチの意義を概観し、competence vs performance や grammaticality vs acceptability などの基本概念を比較検討した。次に、'usage' そのものの諸問題として、「慣用法」と「語法」という用語をあてて区別することを提案した。さらに、'usage' を決定する要因の1つとされている 'acceptability' を 'normalcy' というより広義な概念でとらえることを提案し、より客観的な判断基準となりうる 'frequency' との関連をみた。そして、これら2つはデータとしての共通項ゆえに、'currency' という上部概念でくくり、それらと言語的判断基準となりうる言語研究者としての分析力、いわゆる、'grammar-consciousness' との相関

関係によって、「慣用法」と「語法」というものが区別できると主張した。

コーパスを利用した形での「この表現は存在しない」とか「これはめったに使われない」という言語事実の指摘だけでは、個別的な、周辺的な、あるいは、記述的なものにとどまり、目の前にある個別のようにみえる事象が全体の言語記述の枠組みのなかでのどのように位置づけされるのかについての鳥瞰的な視座が欠落してしまう危険性がある。語法研究をこころざすわれわれ日本人研究者は、データに対しては常に謙虚でありながらも、英語の非母語話者である利点(?)を最大限に生かし、「データ」のむこうにある「理論」をたえず意識するようつとめなければならない。その意味で、データと理論が補完的な関係にあることが認められる場合にのみ、もっとも望ましい語法研究のあるべき姿が具現されると思われる。

注

*本稿は、1995年2月11日に開かれた同志社大学言語学会（於数研出版関西本社大会議室）におけるシンポジウム「Current Issues in Linguistic Theories」で同じタイトルで口頭発表したものに加筆・修正をくわえたものである。

- 1 『英語語法文法学会設立趣意書』による。
- 2 Noam Chomsky, *Aspects of the Theory of Syntax* (Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1965) 4.
- 3 Chomsky, 11.
- 4 Chomsky (11) は, grammaticality (grammaticalness) は, acceptability と同様に, 程度の問題であると述べているが, 通常, 理論言語学の枠組みでは, grammaticality については clear-cut な基準で峻別することが求められている。
- 5 たとえば, 初期の頃にだされた批判としては, Joshua A. Fishman, ed., *Advances in the Sociology of Language, Vol. 1: Basic Concepts, Theories and Problems: Alternative Approaches* (The Hague: Mouton, 1971) 8ff; William Labov, *Sociolinguistic Patterns* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1972) 184-202; Charles-James N. Bailey, *Variation and Linguistic Theory* (Arlington, Virginia: Center for Applied Linguistics, 1973) 23などがあげられる。
- 6 Jan Aarts, "Intuition-based and Observation-based Grammars," *English Corpus Linguistics: Studies in Honour of Jan Svartvik*, ed. Karin Aijmer and Bengt Altenberg (London: Longman, 1991) 47.
- 7 Aarts, 55.
- 8 このような idiosyncratic な構文を手がかりにしながらも, たんなる usage 研究の域にとどまらず, 語彙論・統語論・意味論・語用論をも射程にいれた言語研究に Fillmore らを中心にした 'construction grammar' がある。たとえば, Charles Fillmore, "The Mechanisms of 'Construction Grammar,'" *Proceedings of the Fourteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* (1988): 35-55; Charles Fillmore *et al.*, "Regularity and Idiomaticity in Grammatical Constructions: The Case of *Let Alone*," *Language* 64 (1988): 501-538; Paul Kay, "At Least," *Frames, Fields, and Contrasts: New Essays in Semantic and Lexical Organization*, ed. Adrienne Lehrer and Eva Feder Kittay (Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates, 1992) 309-331などを参照。
- 9 文法的に正しかったり, 容認可能であったりするものを 'usage' とよび, 実際の状況でコミュニケーションに適切なものを 'use' とよんで区別することがある。Sylvia Chalker and Edmund Weiner, *The Oxford Dictionary of English Grammar* (Oxford: Oxford University Press, 1994) 412を参照。
- 10 Robert F. Ilson, "Usage Problems in British and American English," *The English*

Language Today, ed. Sidney Greenbaum (Oxford: Pergamon Institute of English, 1985) 166-167.

- 11 ここでいう「規範」とは、英文法史でいう「規範文法」と同義で、英語としては 'prescription' をあてる。のちの議論で用いる 'normalcy' とは区別されたい。
- 12 Quirk & Svartvik (1966) の実験調査は、'English Honours' の学生28名 (Group I) と地理学専攻の学生48名 (Group II) によるアンケート調査で、次のような結果が得られた。

	Group I			Group II			Total (+only)		
	+	?	-	+	?	-	I	II	I & II
(8a):	21	4	3	35	10	3	75	73	74 (%)
(8b):	28	0	0	40	5	3	100	83	89

詳しくは、Randolph Quirk and Jan Svartvik, *Investigating Linguistic Acceptability* (The Hague: Mouton, 1966) 106-109を参照。

- 13 Randolph Quirk, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik, *A Comprehensive Grammar of the English Language* (London: Longman, 1985) 33.
- 14 Sidney Greenbaum, "Judgments of Syntactic Acceptability and Frequency," *Studia Linguistica* 31 (1977): 83-105を参照。実験対象および内容は次のとおりであった。

Wisconsin-Milwaukee 大学で1974年3-4月に新入生レベルの歴史の大教室の講義に出席した学生を対象にし、被験者は言語学専攻ではなく、主として、1・2年生で、ウイスコンシン州の出身者であった。大部分は、18-21歳の男子学生で、実験目的は "How does language work?" ということを告げ、ボランティアでおこなわれた。内容は、文法的な点で異なる2組の文が各ページに印刷されていて、それについての frequency と acceptability についての判断スケール (very rare—very frequent); (completely unacceptable—perfectly OK) にチェックするよう求められた。

- 15 コーパスを利用した場合に、コーパスのなかにある 'acceptable' な文と実際に生じているけれどもいかなる文法でも説明されない、あるいは、されるべきでない発話との境界線が引きにくい場合が多くみられる。しかも、コーパスにあらわれる文をあますところなく記述することのみ腐心する文法は、たんにコーパスだけの文についての言語学的記述をおこなっていて、それらの記述が当該言語全体への一般化につながるという視点を欠いてしまうことになる。これらに関する議論としては、Aarts, 44-52などを参照。

16 Aarts, 58.

- 17 The currency of a construction is compounded of its frequency of occurrence and its 'normalcy.' (Aarts, 59).

18 František Štícha, "Acceptability and the Scope of Grammar." *The Syntax of Sentence and Text: A Festschrift for František Daneš*, ed. Světlá Čmejrková and František Štícha

(Amsterdam: John Benjamins, 1994) 347.

- 19 Heizo Nakajima, "The Split-Comp Hypothesis and the *Whether-If* Alternation," ms., Tokyo Metropolitan University, 1992.

REFERENCES

- Aarts, Jan. "Intuition-based and Observation-based Grammars," *English Corpus Linguistics: Studies in Honour of Jan Svartvik*. Ed. Karin Aijmer and Bengt Altenberg. London: Longman, 1991. 44-62.
- Bailey, Charles-James N. *Variation and Linguistic Theory*. Arlington, Virginia: Center for Applied Linguistics, 1973.
- Bloomfield, Morton W. "The Question of Correctness," *The English Language Today*. Ed. Sidney Greenbaum. Oxford: Pergamon Institute of English, 1985. 265-270.
- Bolinger, Dwight. *Language—The Loaded Weapon*. London: Longman, 1980.
- Chalker, Sylvia and Edmund Weiner. *The Oxford Dictionary of English Grammar*. Oxford: Oxford University Press, 1994.
- Chomsky, Noam. *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1965.
- Declerck, Renaat. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha, 1991.
- Fillmore, Charles. "The Mechanisms of 'Construction Grammar,'" *Proceedings of the Fourteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* (1988): 35-55.
- Fillmore, Charles, Paul Kay and Mary Catherine O'Connor. "Regularity and Idiomaticity in Grammatical Constructions: The Case of *Let Alone*," *Language* 64 (1988): 501-538.
- Fishman, Joshua A., ed. *Advances in the Sociology of Language, Vol. 1: Basic Concepts, Theories and Problems: Alternative Approaches*. The Hague: Mouton, 1971.
- Greenbaum, Sidney. "Contextual Influence on Acceptability Judgements," *International Journal of Psycholinguistics* 6 (1976): 5-11. Also in Greenbaum (1988). 135-140.
- . "Introduction," *Acceptability in Language*. Ed. Sidney Greenbaum. The Hague: Mouton, 1977. 5-6.
- . "Judgments of Syntactic Acceptability and Frequency," *Studia Linguistica* 31 (1977): 83-105. Also in Greenbaum (1988). 94-112.
- . *Good English and the Grammarian*. London: Longman, 1988. 94-112.
- Iison, Robert F. "Usage Problems in British and American English," *The English Language Today*. Ed. Sidney Greenbaum. Oxford: Pergamon Institute of English, 1985. 166-182.
- Kay, Paul. "At Least," *Frames, Fields, and Contrasts: New Essays in Semantic and Lexical Organization*. Ed. Adrienne Lehrer and Eva Feder Kittay. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates, 1992. 309-331.

- Labov, William. *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1972.
- Nakajima, Heizo. "The Split-Comp Hypothesis and the *Whether-If* Alternation," ms. Tokyo Metropolitan University, 1992.
- Quirk, Randolph and Jan Svartvik. *Investigating Linguistic Acceptability*. The Hague: Mouton, 1966.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman, 1985.
- Quirk, Randolph and Gabriele Stein. *English in Use*. London: Longman, 1990.
- Sampson, Geoffrey. "Evidence against the 'Grammatical' / 'Ungrammatical' Distinction," *Corpus Linguistics and Beyond: Proceedings of the Seventh International Conference on English Research on Computerized Corpora*. Ed. Willem Meijs. Amsterdam: Rondopi, 1987. 219-226.
- Štícha, František, "Acceptability and the Scope of Grammar," *The Syntax of Sentence and Text: A Festschrift for František Daneš*, Ed. Světlá Čmejrková and František Štícha. Amsterdam: John Benjamins, 1994. 341-357.
- van Dijk, Teun A. "Acceptability in Context," *Acceptability in Language*. Ed. Sidney Greenbaum. The Hague: Mouton, 1977. 40-61.
- 山内信幸「*Vice Versa* をめぐって」『ことばの樹海：石黒昭博先生還暦記念論文集』中井悟・龍城正明・山内信幸編 東京：英宝社, 1994. 531-545.
- 安井泉「文の用法を決める因子」『英語語法文法研究』創刊号 (1994): 37-52.

Synopsis

What Should Usage Study Aim At?

Nobuyuki Yamauchi

This is an attempt to consider what usage study in Japan should aim at, by contrast with some discussions about theoretical aspects in usage study abroad, and to explore the scope to be dealt with in the respective usage studies.

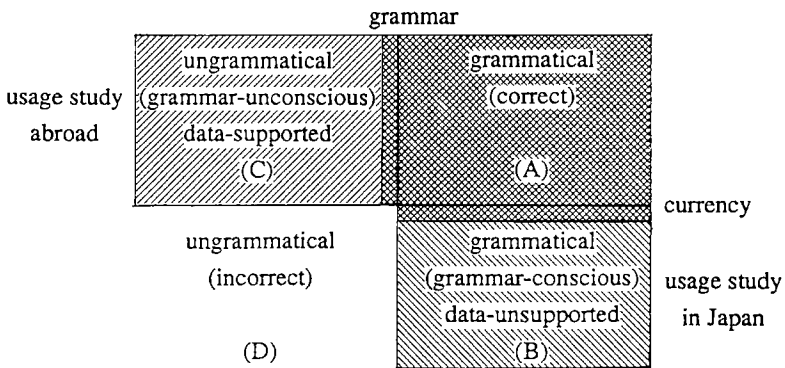
The first point discussed is the significance of two major approaches such as universal grammar vs particular-language grammar or formalism vs descriptivism in linguistic study. One approach should be called a 'theory-oriented approach' and the other a 'data-oriented approach.' The discussion is followed by the reexamination of the problems involved in competence vs performance and grammaticality vs acceptability. I assume that it is important to maintain a well-balanced attitude on linguistic study not only by use of 'central' expressions, a target in the theory-oriented approach, but also by treatment of 'peripheral' ones, a focus in the data-oriented approach.

Next, I touch on what the term 'usage' means in Japan and abroad. The difference of the terminology should be clarified in terms of the possible object of the usage study and the relationship between usage and prescription.

I also consider the theoretical implications of acceptability, which plays an important role in determining usage. Given the definition of acceptability that it is native speakers' (not a native speaker's) judgment on 'language use,' the relationship between acceptability and language use (or frequency) should naturally claim next consideration. The observation in Greenbaum (1976), which gives empirical support to the interrelationship between the two, leads me to maintain that the frequency survey based on the corpus proves to be useful to verify the individually varied and non-objectified standard of acceptability.

As suggested by Aarts (1991), a few coinages are also introduced into the present study. ‘Normalcy,’ which is an alternative term in a wider sense of acceptability, should be used to refer to structures accepted by a large number of native speakers in the language community. Furthermore, normalcy and frequency, which prove to be interrelated, should be incorporated into a higher notion of ‘currency’ for the simplicity of the discussion.

Last, the problem remains to be discussed of the relationship between usage study at home and usage study abroad. The key to this complicated problem is not exclusively in the consideration of currency, a data-oriented source in linguistic study. The linguist’s judgment or grammar-consciousness, which is a reflection of his philosophy of grammar lying behind the collected data, also serves as a useful criterion. Hence the following diagram for the possible domain of usage study in Japan and abroad:



Usage study in Japan is located in the domains of (A) and (B), which put relative priority on grammar-consciousness; on the other hand, usage study abroad tends to center around the domains of (A) and (C), which are treated in the level of currency. (Note that all linguistic phenonema cannot be discretely positioned in each domain; some of them are, of course, on the border line.)

If we are restricted to the observation of linguistic facts based on the corpus, we expose ourselves to danger of losing an important perspective as to how each linguistic phenomenon should be situated in the larger framework of language description. Always keeping a modest attitude toward the data, we

should become more conscious of the 'theory' behind it. In conclusion, it is through the harmony of data with theory that the most promising usage study can be realized.